

ブラジル

小原明子

「おぼろあきこ」ダンサー

川村真倫子

「かわむらまりこ」教育者

小長野道則

「こながのみちのり」森林農業

日本人の文化や考え方が ブラジル文化を豊かにする

文・深沢正雪（ニッケイ新聞編集長）
ふかさわまゆき

昨

年のブラジル日本移民100周年では、当地・ブラジルに住む日本移民およびその子孫全体が一般国民から盛大に祝われた。25万人もの日本人が持ち込んだ文化や考え方が、一世紀という長い時間をかけて適応・熟成され、現地風土に合わせた日系文化として花開き、ブラジル文化を豊かにするという活躍をコミュニケーションとして行なってきたことが高く評価されたからだと言われる。

なぜ日系文化が形成されてきたかと言えば、日本独自の考え方や

（テリ側）イン祭り
（中央）・デ地方の
（右）・インの短髪女性
（左）「フェスタ・デ・リオールの11月の原明子さんの写真提供：筆者（以下も同じ）」



センスを発揮して国家建設に寄与することが現地から求められたからだ。一般社会の許容性の広さと、日本文化の可変性がそれを可能にした。その成功例といえる代表的な3人を紹介したい。

舞踏が突き詰めたあり方と 開拓精神は共通する

半世紀前に一緒にモダンバレエ

を志しながら、地球の反対側で新たな地平をそれぞれ切り開いた対照的な2人がいる。暗黒舞踏の創始者として世界に名高い土方巽（ひじかた）（故人）と、ブラジルのユババレエ指導者の小原明子（旧姓は図師、74歳）だ。

白塗り装束に土着のかつ不気味ともいえる所作が強い印象を残す

舞踏と、創立者・弓場勇の「祈り、耕し、芸術する」というモットーに賛同する約70人が共同生活する弓場農場の、明るく大家族的な雰囲気表現するユババレエとは、地理的以上に表現する内容も対照的だ。しかし、小原は「実は通底するモノがある」と言う。

1950年代後半、2人は東京のユニークバレエ団の一員として5年間ほどパートナーを組んで舞台やテレビの仕事をしてきた。当時20歳すぎの小原は、いくらモダンバレエに打ち込んでも公演は赤字だし、客層も限られていると限界を感じていた。一方、土方は大野慶人と組んで59年に最初の舞踏作品『禁色』を発表し、新人賞をとり注目を集めていた。安保闘争の大嵐が吹き荒れた61年の末、小原は恋人が「ブラジルに行く」と言い出したことから、「1年ぐらいなら」と気分転換のつもりでついていった。ところが、到着した弓場農場で16歳の少女から「踊りを教えて」と頼まれ、「やるからには3年は続けて」との心構えを説いた。それがバレエ団結成につながる。年

ふかさわ まさゆき●静岡県生まれ。1992年にブラジルに初渡航し、邦字紙「パウルスタ新聞」で研修記者。95年に帰国し、群馬県大泉町でブラジル人との工場労働の体験を描いた『パレル・ワールド』(99年)で潮ノンフィクション賞受賞。同年、再び渡伯。2001年よりニッケイ新聞に勤務し、04年より現職

末恒例のクリスマスの余興の準備の真っ最中で、間に合わせるよう農場の全員が協力してわずか1週間で劇場まで建設してしまっただけ。」「すごい世界に入っちゃったなと思いますよ。ここでは『やったことがないからできない』とは絶対に言わない。しばらく考え込んで『これでいいか』って、やってくる』

あるとき、小原はふと気づく。「この態度は単なる生活者のものではない」と。「何もないところから自分のイメージしたものを創造する。開拓生活はアートそのものだと気づいたんです。驚異でした。それでめり込んでしまっただけ。気がついていたら、48年たっちゃった」と笑う。

土方巽は故郷秋田の西馬音内(にしまねい)の盆踊りに象徴される風土に洗礼を受けたことをまっすぐに受けとめ、土着性を重視する舞踏へと歩みを進め、結果的に世界から注目された。小原は解説する。「舞踏は食うや食わずで、自分の持てるものを徹底的に突き詰めた人ばかり。だから生半可な作品は一つもない。開拓者も命を賭けて、自分のすべてを出しつくして、必死に

生活をつくりあげていった」

数百年前から旧大陸内で移住を繰り返していた欧州系移民と違い、ブラジルにきた日本人には外国生活の経験はまったくなかった。どうしたら異国で子どもにも文化を伝承し、地域社会にうまく適応していけるかというノウハウを一からつくりだした。

もちろん、踊りの技術だけみればもつとうまい人はいくらでもいる。「ユバにはプロではないのに観客を感動させる何かがある。それは生活に対する態度がにじみ出ているからだと思う。単なる踊りではなく、一つの思想表現だから感

動させる何かがにじみ出る」。

いわば、文化的な開拓だ。だから「舞踏が突き詰めたあり方と、日本移民の開拓精神は根の部分で共通している」と生活態度の相似を説明する。「共同体の根本精神が本物であれば弓場農場は残っていく。その表現の一つがバレエであり、精神が継承されればすなわちバレエも残る」。

昨年8月、日本国から外務大臣賞、同10月にはブラジル文化省から文化功労賞を受けた。

日本人の良さを教えつつ 多文化社会形成に寄与する

「日本の良さ」にこだわる二世教育者がいる。サンパウロ州奥地で生まれ、41年に教育のために親の郷里の三重県に送られ、そこで師範学校を卒業し、終戦後に帰伯して以来、日本語教育一筋の人生を送る川村真倫子(81歳)だ。51年には日本語学校「松柏学園」、それを拡大発展させ、娘・真由実とともに私立小中学校「大志万学院」を90年に設立した。

その学校では2年に1度、修学旅行で日本へ行く。その定番コースが伊勢神宮だ。しかも2月の早朝5時、寒くて暗い朝もやのなか、子どもたちに玉砂利の参道を歩かせる。

「あの時間でないとな当の神々しさは味わえません。おもしろいんですよ。最初は『寒い、眠い』って怒っていた子どもたちが、歩いているうちに朝日が差しこんでくるとだんだん神妙な表情になる。そして最後には『感動した』と言ってくれるんです」

観光地をただ見せるのではない。「日本の良さ」を体験させるのだ。「日系人としての誇りは重要です。日本のことを良く知っていたほうがブラジル人から尊敬されます」とブレはない。

日本語学校の月謝は安いのが相場だが、ここだけは別だ。「日本語は素晴らしい言語であり、英語やスペイン語より安いことは日本語への冒瀆です」と父兄を説得する。日伯の絆を強める人材を育成することを目標にするから、高度な日本語能力の習得を掲げる。授業で



川村真倫子さん。後ろは松柏学園が入っている大志万学院の校舍



森林農業の“畑”。単一作物の栽培ではなく、高木のマホガニーのそばに、こんもりと茂った胡椒や広い葉のバナナ、さらにその合間にさまざまな熱帯果樹が植えられている。左は小長野道則さん



は単語の表面的な意味だけでなく、ニュアンスまでじっくり説明するので、「道」という言葉一つを教えるのに1時間かかる」という。約300人の生徒の大半は日系子弟だが、文化や民族を普遍的なレベルで説く教育方針に賛同する中国系、韓国系、ドイツ系、ロシア系の両親も子どもを通わせる。卒業生には錚々たるメンバーがいる。松柏学園の名は「あたり一面が枯れつくす季節にも松と柏だけは青々とした葉を残す」との論語の

一節に由来する。たんに移住先国に同化するのではなく、各コミュニティが特徴を残して多文化社会形成に寄与することが認められている。イタリア系、オランダ系、ユダヤ系など多様な木々が一定の調和を保って形成した森は、より豊かな生態系を持つのだろう。

日本の伝統的な自然観と先住民の知恵が融合した農法

今年9月にアマゾン入植80周年が現地で大いに祝われたが、その発端となった最古のトメアスー移住地から、最も新しい森林農業が生まれている。その現地普及のリーダーが、日本生まれでありながら昨年まで4年間、郡農務局長を務めた小長野道則（51歳）だ。川沿いで伝統的な暮らしを送る先住民が庭に多様な果実を植えて自給自足の生活をしている姿を見た戦後移民の坂口陞（のぼる）が思いつき、自分の畑にさまざまな作物を計画的に混植しはじめたことから生まれた農法だ。同じ場所に稲パッション・フルーツ、バナナ、カカオ、マホガニーなどを植え、数年ごとに収穫物が移り変わりなが

ら、最終的には極相の再生林になる特異な農業だ。

なぜ近代農業の基本である単一作物大規模栽培をやらないのか。アマゾンの大自然は頑なにそれを拒みつけてきたからだ。かつてフオードが莫大な資金を投じて、大ゴム園をつくったが、撤退した。ドイツ人やスペイン人も入植したが、病害で痛い目にあって退いた。日本人も一時は胡椒で黄金期を迎えたが、わずか10年余りで根腐れ病が蔓延して、壊滅的な被害を蒙った。でも踏ん張り続け、伝統的な生活をする河の民に学んで新しい農法を生み出した。15年前、少数の日本人農家だけだった森林農業は、小長野さんらの活躍によって現在では日系人200家族、ブラジル人5000家族にまで拡大した。このやり方なら、伐採されて荒れた土地を癒して森林を増やし、しかも生計が成り立つ。

世界的な環境問題の現場であるアマゾンで日本移民が考え出したこの農法は、祖国の伝統的な自然観と先住民の知恵が融合した思想的産物といえる。

自らの強みや長所を伸ばす形で移住先の国に貢献する

ブラジル移民が強い日本人意識を持つようになったのは、外国という不安定な環境で踏ん張るために、常に足下を見つめ直し続けたからだ。この日本人意識は国粋的なものとは似て非なるもので、異文化に直面したときに、相手を正確に理解するためのモノサシでもある。圧倒的な異国文化に囲まれた環境では、自らの生まれや資質を見つめ直さざるをえない。そのなかで日本人としての育ちを痛感し、自らの強みや長所を伸ばす形で移住先の国に貢献することが、一番効率的かつやり甲斐のある方法だと考えるようになる。これはブラジル移民100年の経験から導き出された一つの結論だと思う。

グローバル化が進展する現在、日常的な異文化接触が日本国内でも起こりつつある。自信を持って日本人としての独自性を突き詰めることで国際的にも通用するようになるという発想は、もっと幅広く認識されてもよい時代になってきているようだ。☺